東京日々新聞

七百五十四號

西京四条高倉辺に住る老媼なり。身に襤褸を纏ひて垢面に賣品の炭團に似たる故とりて炭團婆々と称ぶ。自ら一荷の炭團を擔ひ日く洛中を呼歩行その郷音と形像の嘆辞おもしやと失笑せ。祇園の歌妓が稲交際へ阿嬢い何が可笑さや。吾が斯く真黒に成て呼あるく。阿嬢が眞白に粧たて歌ふ舞も俱に皆同じ渡世業ぞかし。阿嬢い吾を笑へども吾い又其方衆が鄙き渡世を笑ふあり。吾も二人の女子ありて容貌も此婆々に似ず。年紀も又阿嬢等に似たるが。鄙賤き業を為たくあらず堅き商家へ奉公させ。晝夜稼ぐ炭團の銭僅に美餘の該中と衣服の些料とを送るも。賤い心を起せぬ爲あり。斯に無禮なる詈ぐらく阿嬢等が無道理と。

△取違へ恥を知らぬが痛しさ。

鄙き心と正し良家の細君

轉々堂主人編

炭團〳〵と呼あるく三条の方へ去ふ者

さぜ。吾が身と去指せ。傍に下せし荷と指げ

人形師 臭足屋 尼田彫長

蕙齋芳義画